

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月21日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320165

研究課題名（和文）日本「周辺」地域にみる国境変動とアイデンティティ：韓国・台湾との越境を巡って

研究課題名（英文）Transnationalism and Identity in the peripheries of Japan: a comparative study of Japan-Taiwan and Japan-South Korea border regions

研究代表者

上水流 久彦（KAMIZURU HISAHIKO）

県立広島大学・地域連携センター・講師

研究者番号：50364104

研究成果の概要（和文）：八重山・台湾、対馬・韓国という国境が移動した二つの境域では、自由な往来と断絶の歴史を経て、現在、相互の関係を強化しようという動きがある。その動きを交流する両者の立場から調査分析した。その結果、①植民地期も含めた過去の歴史は再解釈されることで現在の国境間の往来を動かす資源となっているものの、再解釈のあり方は異なっていたこと、②境域という周辺にあるが故に八重山、対馬では脱国家的試みが行われていたが、実際には国家制度や国家間の関係の影響をむしろ強く受けていたこと等がわかった。国境の持つ透過性と拘束性の二面性が国際関係の変化のなかで変容する様を通時的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In the two boundary regions of Yaeyama-Taiwan and Tsushima-Korea where national borders have changed, and after passing through a history of both unregulated and banned human movement across these borders, there are now movements seeking to strengthen mutual relationships. A survey and analysis was conducted from the standpoint of people taking part in these movements. What came to light in the results included the following: 1) The reinterpretation of past history, including the colonial period, has come to fuel peoples movement across the present national boarder area, however the form of these reinterpretations differ; 2) As positioned on the periphery as boarder territories, in Yaeyama and Tsushima there is an attempt underway to escape from national consciousnesses, but in reality this has conversely led to a strengthened influence from national systems and from relationships between the nations. This research makes clear, within the context of international affairs, the diachronic shape of change of the dual aspects of national boarders, permeability and restrictiveness.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
2010年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2011年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
年度			
年度			
総計	12,900,000	3,870,000	16,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：越境・台湾；先島・韓国；対馬・観光・国民国家・植民地・海域・文化変容

1. 研究開始当初の背景

（1）学術的背景

国境を越えた移動は単一方向の一度きりのものから、双方向的または多方向的かつ常態的な移動に変化してきた。前者では経済的政治的なプッシュ・プル要因を重視し、国民国家の枠を前提とした、移民のホスト地域への統合が中心的課題であった。後者ではグローバリゼーションという言葉で語られる資本と技術の移動、海外出稼ぎ、消費文化、旅行などが取り上げられ、ディアスポラやトランスナショナリズムという概念で捉えられてきた。技術的な移動ではグローバル技術の現地化や伝統との接合が焦点となった。そのなかで多元的帰属意識や多元的なネットワークが形成されるようになり、重要な研究課題となった。

## (2) 地域研究上の背景

台湾、韓国ともに、近代において日本に植民地化された場所である。そのため、本研究が対象とした台湾—沖縄、韓国—対馬には、戦前は国境がなかった。戦後、国境線が引かれ、さらに国際政治上の駆け引きや経済的問題から、地域間交流が制限されたり、緩和されることもあった。この国境変動、再設定は人々の生活や意識に大きな影響を与えてきた。このような地域は、近年、地域振興と活性化という共通する課題をかかえている。そこで出てきたのが、国境線の無かった時代、つまり植民地時代やそれ以前の経験、事件、記憶を資源として活用していく動きである。

台湾と沖縄、韓国と対馬で共通しているのは、①海による分断と近接、主に船による移動、②同じ国家に帰属したという植民地経験、③交易や交通の拠点から戦後の国境変動による周辺化、④交流の模索、地域振興と観光への期待、と整理できる。一方、相違点は、台湾と沖縄の場合、親近感と日常的人の交流の存続、台湾系華僑・華人、台湾系沖縄人の往来が見られるのに対し、韓国と対馬では領土問題とナショナリズムの問題が時に顕在化し、そして個々の人々の日常的往来が限定していることがあげられる。

このような歴史を持つ対馬・韓国、八重山・台湾の二つの境域であるが、これらの境域に関する研究は時代的に戦前、戦後に限られており、国境変動が通時的に分析されておらず、過去の記憶を持つ人々も少なくなる現状が存在した。

## 2. 研究の目的

上記のような歴史を持つ二つの境域を調査することで、本研究では国境が持つ拘束性と透過性との間で生きる人びとの境界に対する認識とその実践、並びに国境が人びとの暮らしや自己認識、空間認識に与える影響を明らかにすることを第一の目的に、さらにそれらの影響と政治経済的変

化との因果関係を比較し、境界領域で国家と駆け引きをしながら生きている人びとの姿から、国境という「境」が持つ意味を探ることを第二の目的とした。

## 3. 研究の方法

主に文化人類学の手法で以下の三点を連関させながら、複数の研究者が相互の視点から進めた。

- ①日本による東アジアの植民地支配といった歴史的な経緯と政治性と越境現象の関係
- ②経済的振興や地域間交流の模索、アイデンティティの在り方といった、今日地域社会が抱える課題と試みと越境現象の関係
- ③ナショナリズム、国境や領土という極めて政治的な現在進行形の問題と越境現象の関係

## 4. 研究成果

越境研究としての本研究の成果の特徴は、周辺に位置し、海で隣接する境域を研究した点にある。地域間の越境の歴史は、個人の往来とは異なる位相の問題を生み、既存のトランスナショナリズム研究や越境研究に新たな視角を加えることができた。具体的な成果は以下のとおりである。

### (1) つなげる海と柔らかい国境と固い国境

東シナ海域では、かつての帝国日本の枠内で行われた移動にはじまり、台湾（中華民国）と沖縄との間で生まれ変化してきた国境を挟んでの越境へと変わった、人びとの双方向的な動きが日常的に行われてきた。さらに、その経験を持つ台湾東海岸の人びとは、日本の排他的経済水域を前にして、過去の行き来を参照して新たな領域での越境を築こうとしている。八重山および台湾東海岸の漁民らによって示される移動／越境の実践は、越えることが容易な〈柔らかい〉境界の存在と、1970年代から次第に強まる国家による管理が及ぶ海域における日本と台湾の主張が交錯する〈固い〉境界へと変質していく様子を照らし出していた。

そのような国境のあり方からは、海をつなげる力が確認された。陸地を中心とした移動の場合、海は「隔てる」機能に目が向きがちである。だが、二つの境域は植民地期を中心に自由に船で行き来をした記憶が、二つの地域を感覚的に「近い」と現地の人々に思わせ、国境を越えた活動の欲望をかき立てていた。

### (2) 選択される歴史と歴史の資源化

二つの境域においては、いずれも植民地期に海をこえて自由に往来していたことを基盤に現在の交流が考えられていた。だが、対馬では朝鮮通信使という親善の歴史が、交流の正当化に使われ、一方、八重山では植民地期末期や直後の自由な往来の経済的文化的繁栄が交流の正当化の論理に用いられてい

た。さらに植民地期の交流の記憶が、日本側では存続していたのに対し、韓国、台湾ではほぼ忘却されていた。これらのことは過去が現在を動かす資源となっていると同時に、その資源化において過去の経験が、記憶と忘却という形によって都合の良い形で再編されていることを示している。

### (3) 越境経験による国民国家の脱構築

那覇や福岡を経由して台湾や韓国と往來することが当然視されるなかで、先島（宮古・八重山）や対馬が、隣接する外国と直接交流することは、当時、周辺にある不利な状況を利点に変える画期的試みで、そこには国策の変更で周辺としておかれてしまったことからの脱却、脱中心化、国境の無い時代の肯定的往來の経験や記憶を元にした、新たな交流領域の設定、再領土化の希求、自己の再認識というものがある。国家制度の中で常に後回しの扱いをうける地域が、国家に頼らない形で自立を図ろうとするものであった。

例えば、「牡丹社事件」の歴史解釈では現在、台湾の恒春地方のパイワンの知識人層を中心に地元住民によってなされ、これらの歴史事件の再解釈や資源化、沖縄・宮古との対話や交流の試みがある。この歴史事件はパイワン・沖縄双方にとって、国家との関係に大きな変化を強いられた転換点となるものであり、その発端となった歴史事件をめぐるパイワンによる再解釈は、国家と自らの関係を再定位しようとする実践と理解することができる。また、新たな歴史解釈を用いつつ歴史事件を観光資源・郷土教育教材として活用しようとする資源化の実践からは、生活者のたくましさやしたたかさをも観察することができた。そして、両地域の住民による直接的な対話や交流には、それぞれのうちに内在化された国家や主流社会の諸価値や諸観念を相対化させ、多様な文化に配慮し他者を尊重しようとする契機が内包されていた。

### (4) 国家制度の拘束性

「周辺」の活用と越境経験の合目的的利用は、意識的であれ無意識的であれ国家制度への抵抗であった。だが、そのような動きからは、逆に国家制度に大きく左右される「周辺」のあり方も明らかとなった。

例えば、越境した経験や地理的近さは八重山や対馬に相手を知っているという認識を生んでいた。だが、実際には相互の理解、交流や観光の思惑においてズレが生じていた。釜山や花蓮において、直接、植民地期に行き来をしていた記憶は社会的に継承されてはいなかった。対馬を訪れる韓国の観光客の観光動機とその背景の研究では、対馬の朝鮮半島との交流という目的と、韓国側の観光動機や要求にはズレがあり、それは観光の需要と供給の問題だけではなく、歴史解釈や空間認識の違いから来ていた。

国家間の関係の拘束性も明らかとなった。八重山・台湾、対馬・韓国の境域での交流の試みの狙いは直接的な行き来を増やし、その結果、地域振興を図るという点で同じであった。かつ、国家から自立した営みを目指す点でも同様であった。だが、実際に行われている内容は、日本と台湾、日本と韓国という両国の国家間関係が強く作用していた。反日像の強い韓国との交流は、交流の正当化を強く押し出すことが対馬では求められ、他方、親日像の強い台湾との交流は八重山において台湾の軽視とも言えるような動きを生んでいた。日本国内からのまなざしを内面化し、それへの対処をとるという点において、脱国家的な目論見はうまく行っていなかった。

### (5) 物質文化の台湾・八重山境域の影響

沖縄民具（物質文化）における、複数の系統の様相と時系列での変化について明らかにした。沖縄民具は中国系、大和系、南方系、在来系という四つの要素が混在している。形態的特徴などから在来系と外来系に区分し、割合を勘案することで沖縄文化の多元的諸相に迫った。特に「クルバシヤ」と呼ばれる、近代に台湾から八重山地方にもたらされた農具に着目し、台湾からの人の移動が沖縄に与えた影響を総合的に検討した。

### 国内外における位置づけとインパクト

#### (1) トランスナショナリズムの批判的検討

現在、地方自治体が国外と直接交流することは各地で行われている。だが、対象地域は国家の「周辺」として隣接するが故に一層国家制度や国家内のまなざしを意識していた。自由な行き来は、「周辺」であるが故に国境のゆらぎを招き、対馬では「韓国に乗っ取られる」という言説まで生み出しており、それに対する声を対馬側は出さなければならなかった。「周辺」ゆえに脱国家的な試みを行おうとするが、「周辺」故に一層「境界」が意識されていた。ここからは一見、国家制度から自由になるようとする試みや活動における国家制度の拘束性を詳細に検討する必要性を指摘できる。トランスナショナリズムは、一度のみ一方向的な動きとは異なる、複数の国家を頻繁に移動する現象の特質を捉えようとするものであったが、国家に拘束されない空間や行為の創出は改めて批判的に検討すべきである。

#### (2) 地理的近接性と歴史の語り直し

現代において、歴史事件の再解釈という実践は国家から小規模な地域社会までさまざまな社会単位において繰り返行われている。本研究は、先住民が国家の歴史解釈に抗して自らの歴史語りを紡ぐという実践を事例としており、マイノリティによる歴史構築の事例研究の一つといえる。しかし、本事例では、境域に生きるマイノリティによる歴史

語りが国家に対してというよりも、境界の向こう側の住民（もう一方のマイノリティ）に対して直接示され、交渉がおこなわれたという側面に焦点を当て、その意義を論じたという点に特徴が求められる。これは、近接する地域間の越境現象を事例としたからこそ可能になった視点であろう。

### （3）越境自体の対象化

トランスナショナルリズム研究あるいは越境研究と呼ばれるその研究は国境の強い実在性を前提としている。本研究では、その見方に揺さぶりを掛け国境の変動を視野に入れた。ある空間の中に国境が生じる前後、そしてその境が時々に見せるその姿を、生きる人びとの視点から考察を行った。

また、これまでの対象地域の越境研究のほとんどは海を渡るという実践そのものよりも、海を越え行き来した場所での体験やその渡った土地での経験が持つ意味を問うことに主眼が置かれている。このため、海によって隔てられかつ結ばれている海域そのものに対する着眼が背景に追いやられている。本研究では、黒潮が流れる東シナ海を生産の場とし移動を必然とする漁民たちに着目することで、先行研究を補完できた。

### （4）物質文化にみる植民地期の影響関係

台湾では日本の植民地時代、つまり近代の建造物や物質文化が文化財に指定され、保護されている。これにより、近現代の物質文化に対する研究も盛んである。一方、日本においては、澁澤敬三が独自に定義した「民具」という概念が独り歩きをし、次第に近現代に取り残された存在となっていった。こうしたズレが歴然と横たわっているために、日本植民地時代にヒト・モノ・情報の行き来があったにも関わらず、戦後に国境が引かれたために、これを同一の基準として見ること、比較することがおこなわれてこなかった。これらの問題を補う成果をあげることができた。

## 今後の展望

### （1）地域振興と越境、植民地の記憶の関係

本研究で扱った事例の現場においては、越境者やその子孫、それを取り巻く人々が、経験、記憶、事件を資源化して、国境を越えるトランスナショナルな試みにつなげていこうとしている。さらに自らの存在を問い直す、その試行錯誤の過程がある。そこでは植民地経験や、国家間のナショナルな境界をめぐる政策が如何に地域に影響を与え、逆にどのようにして地域振興に活かすのが研究課題となり、現場の困難さや矛盾が研究の重要な焦点となった。そして、単に政治や経済上の問題だけでなく、現在の社会情勢の中、台湾側と沖縄側、韓国側と対馬側、この両者の求めるものと目指すものとの違い、往来するゲストとホスト側の意識差、当事者たちの思惑や自己認識の差異も浮かびあがってきた。

今後は別個に展開してきた、植民地経験と政治性、越境現象と文化・社会変化、地域振興と観光といった研究テーマを束ねる理論的展開を図る必要がある。第二に、研究成果を還元する意味で、実践的に地域間交流を目指す現場とのコラボレーションを視野に入れた研究が望まれる。

### （2）主流社会の歴史解釈の脱構築

近年、台湾では先住民の歴史の再解釈、とりわけ日本植民地期の歴史事件の再解釈が盛んだが、そのなかで「霧社事件」に代表される「抗日」の歴史事件は時として主流社会や国家の歴史に回収され、政治的に利用されやすいという側面をもつ。しかし、そのような動きに抗して歴史事件を民族や村の歴史として取り戻そうという動きや議論も少なくない。このような類似する現象との比較・分析によって、越境を視角の一つにすえた本事例研究の意義はいつそう明らかになるものと思われる。

### （3）境域研究の理論化

人とモノ、そして情報が行き交う東シナ海海域について、空間としての、そして場としての海域という分析の枠組みを持ち込むことで境域の分析を発展させることが可能となる。空間としての海は、〈境〉＝国境の存在を所与としたものであり、場としての海は、ヒト・モノ・情報による働き掛けによって複層的に意味づけられるものである。これらの空間と場の二面性の相互関係を考察することで、空間にもなりえ、場にもなりえる「境域」という概念化の道が開けると考えられる。

### （4）material agency への展開

単に物質文化のみへの言及で終わるのではなく、近年注目されている material agency の概念も用い、モノとヒトの有機的関係を明らかにできるようなアプローチが必要であると考え。そのためには、長期的に同一地域で調査を実施する必要性と、文書も含めた悉皆調査が必要であるだろう。

なお、2012年度内に、本研究の成果をまとめた論文集を上水流久彦、村上和弘、西村一之の編集によって風響社より出版する予定である。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計12件）

- ① 宮岡真央子、〈番租〉を介した民族像——台湾原住民族ツォウを事例に、国立民族学博物館調査報告、査読有、104巻、2012、75-87
- ② 角南総一郎、海と墓—瀬戸内と南島を例に一、万葉古代学研究所年報、査読無、10号、2012、43-50

- ③ 上水流久彦、「周辺」にみる国民国家の拘束性—台湾人の八重山観光を通して—、北東アジア研究、査読有、20号、2011、51-66
- ④ 上水流久彦、対馬海峡から見る台湾と八重山の「交流」、白山人類学、査読有、14号、2011、22-35
- ⑤ 角南聡一郎、野壺の民俗考古学、国立歴史民俗博物館研究報告、162巻、2011、99-121
- ⑥ 角南聡一郎、台湾の樹木葬—比較文化研究の視座から—、民俗文化研究、査読有、11号、15-27、2011
- ⑦ 西村一之、台湾東部における「歴史」の構築：「祠」から「神社」へ、『日本女子大学紀要 人間社会学部』、査読無、21号、1-16
- ⑧ 西村一之、台湾東部漁民社会における中国人—大陸漁工をめぐる民族関係—、白山人類学、査読有、14号、2011、35-48
- ⑨ 村上和弘、対馬における「国境」と「交通」、人文学論叢、査読無、12号、2010、51-63
- ⑩ 角南聡一郎、日本人による宋胡録収集—宋胡録人形記述分析を中心として—、博物館学芸員課程年報 Musa、査読無、24号、2010、9-18
- ⑪ 上水流久彦、台湾東部と沖縄先島諸島にみる越境現象、世新大学日本語文研究、査読有、1号、2009、21-36
- ⑫ 村上和弘、近現代対馬における「海域」と「越境」～海上交通と南北間の距離感をめぐって～、人文学論叢、査読無、11号、2009、49-62
- [学会発表] (計29件)
- ① 角南聡一郎、墓標・石像を削る習俗—墓の二次利用に関する考察—、東アジア人類学研究会 第29回例会、2012年1月22日、東京大学
- ② 角南聡一郎、琉球民俗にみる外来系要素—物質文化を例として—、日本民俗学会第63回年会、2011年10月2日、滋賀県立大学
- ④ 森田真也、沖縄石垣における台湾系華僑・華人の越境経験と宗教的实践—『土地公祭』を中心として—、日本民俗学会第63回年会、2011年10月2日、滋賀県立大学
- ⑤ 上水流久彦、分科会：越境経験の資源化・歴史化：日本の周辺地域における国境変動をめぐって、日本文化人類学会第45回研究大会、2011年6月12日、法政大学
- ⑥ 西村一之、移動・移住の経験と実践：東シナ海国境海域をゆきかう漁民たち、日本文化人類学会第45回研究大会、2011年6月12日、法政大学
- ⑦ 村上和弘、近現代対馬における「交流」の記憶とその利用—交通と他者表象をめぐって—、日本文化人類学会第45回研究大会、2011年6月12日、法政大学

- ⑧ 宮岡真央子、歴史事件の再解釈と資源化—台湾原住民族パイワンによる「牡丹社事件」をめぐる交渉、日本文化人類学会第45回研究大会、2011年6月12日、法政大学
- ⑨ 角南聡一郎、記憶の流用・マイノリティー・アイデンティティの再生産：台湾東部における展示施設と土産物に注目して、日本文化人類学会第45回研究大会、2011年6月12日、法政大学
- ⑩ 上水流久彦、親近感を語るための道具としての台湾漢族の「同姓」、日本台湾学会第13回学術大会、2011年5月28日、早稲田大学
- ⑪ 西村一之、台湾東部漁民社会における漢族の父系親族原理の持つ意味—漁撈集団の形成と維持を例に—、日本台湾学会第13回学術大会、2011年5月28日、早稲田大学
- ⑫ 村上和弘、対馬の自然と文化、古事記編纂1300年祭記念フォーラム「神々の舞い降りし島—自然と文化の再発見—」、2011年2月20日、隠岐島文化会館
- ⑬ 上水流久彦、台湾漢族社会における通時的分析資料としての訃聞の可能性、日本華僑華人学会第3回研究会、2010年12月4日、東亜大学
- ⑭ 上水流久彦、対馬海峡から見る台湾と八重山の「交流」、フォーラム「台湾をめぐる境域」、2010年11月6日、東洋大学
- ⑮ 西村一之、台湾東部漁民社会における中国人漁民：大陸漁工をめぐる民族関係、フォーラム「台湾をめぐる境域」、2010年11月6日、東洋大学
- ⑯ 宮岡真央子、時代相隔的兩位學術探險家—森丑之助與楊南郡老師、楊南郡先生及其同世代台灣原住民研究與台灣登山史國際研討會、2011年11月6日、国立東華大学(台湾)
- ⑰ 角南聡一郎、眠りの比較民俗学—東アジアの寝具に着目して—、第62回日本民俗学会年会、2010年10月3日、東北大学
- ⑱ 上水流久彦、訃聞にみる台湾漢族の親族觀念の変遷、日本文化人類学会第44回研究大会、2010年6月13日、立教大学
- ⑲ 角南聡一郎、台湾先住民の連杯—酒造・飲酒の研究史と日本国内所在資料の関係性を中心として—、日本文化人類学会第44回研究大会、2010年6月13日、立教大学
- ⑳ 上水流久彦、台湾東部と八重山との観光交流にみる自画像と他画像の差異、交錯する北東アジアアイデンティティの諸相研究会ワークショップ、2010年3月15日、島根県立大学
- ㉑ 角南聡一郎、現代台湾における新しい葬墓制—納骨塔と樹木葬に注目して—、最近の葬墓地をめぐる詩学と政治学：韓・台・日からの「喪ノ学」事始、2010年1月24日、

- 京都大学総合博物館
- 22 角南聡一郎、台湾先住民の喫煙具－研究史の歩みを中心として－、第34回日本民俗学会、2009年12月6日、京都造形芸術大学
- 23 角南聡一郎、元興寺と百済の対外交流－瓦を題材として－、INTERNATIONAL FORUM ON CULTURAL BREATHING BAEKJE IN EAST ASIA、2009年10月9日、韓国伝統文化学院
- 24 角南聡一郎、台湾客家の祖塔と日本の墳墓堂・納骨塔、第61回日本民俗学会、2009年10月4日、國學院大學
- 25 村上和弘、近現代の対馬における海上通史記述の試み～「越境」までの距離感をめぐって～、日本島嶼学会2009年次大会、2009年10月2日、久米島町具志川農村環境改善センター
- 26 角南聡一郎、民俗を図説する試み－本山桂川を例として－、柳田国男研究会例会、2009年9月12日、名勝大乗院庭園文化館
- 27 角南聡一郎、Education of Fine Arts and Study of Material Culture in Early Modern Japan、International Convention of Asian Scholars 6、2009年8月9日、韓国・Daejeon Convention Centers
- 28 西村一之、The Technical Culture of Harpoon-fishing for Marlin at a Fishing Port of Postcolonial East Taiwan、Conference of Society for East Asian Anthropology, American Anthropological Association、2009年7月4日、中央研究院（台湾）
- 29 上水流久彦、台湾東部と先島諸島にみる越境－観光にみる相互理解の差異、日本文化人類学会第44回研究大会、2009年5月30日、国立民族学博物館

〔図書〕（計14件）

- ① 上水流久彦、他、アジア経済研究所、交錯する台湾社会、2012、374（139-173）
- ② 宮岡真央子、他、関西学院大学出版会、日本の人類学、2011、774（77-120）
- ③ 角南聡一郎、他、関西学院大学出版会、日本の人類学、2011、774（403-441）
- ④ 角南聡一郎、他、高志書院、石造物の研究、2011、300（249-258）
- ⑤ 上水流久彦、他、風響社、台湾における〈植民地〉経験：日本認識の生成・変容・断絶、2011、347（25-54）
- ⑥ 西村一之、他、風響社、台湾における〈植民地〉経験：日本認識の生成・変容・断絶、2011、347（99-140）
- ⑦ 角南聡一郎、他、有志舎、東アジアの民族的世界、2011、305（247-276）
- ⑧ 角南聡一郎、他、六一書房、坪井清足先生卒寿記念論文集、2011、1312（290-298）

- ⑨ 上水流久彦、他、風響社、交渉する東アジア 近代から現代まで－崔吉城古希記念論文集、2010、279（119-137）
- ⑩ 宮岡真央子、他、風響社、馬淵東一と台湾原住民族研究、2010、304（231-251）
- ⑪ 角南聡一郎、他、順益台湾原住民博物館、百年來の凝視、2009、214（160-165）
- ⑫ 宮岡真央子、他、順益台湾原住民博物館、百年來の凝視、2009、214（71-86）
- ⑬ 宮岡真央子、他、世界思想社、先住民とは誰か、2009年、353（293-317）
- ⑭ 角南聡一郎、他、六一書房、考古学と地域文化、2009年、816（323-336）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/~kamizuru/ekkyo/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

上水流久彦（KAMIZURU HISAHIKO）

県立広島大学・地域連携センター・講師

研究者番号：50364104

### (2) 研究分担者

村上和弘（MURAKAMI KAZUHIRO）

愛媛大学・国際連携推進機構・准教授

研究者番号：40363262

森田真也（MORITA SHINYA）

筑紫女学園大学・文学部・准教授

研究者番号：10412686

宮岡真央子（MIYAOKA MAOKO）

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：70435113

西村一之（NISHIMURA KAZUYUKI）

日本女子大学・人間社会学部・講師

研究者番号：70328889

角南聡一郎（SUNAMI SOICHIRO）

財団法人元興寺文化財研究所・研究部・主任研究員

研究者番号：50321948

### (3) 研究協力者

中村八重（NAKAMURA YAE）

韓国外国語大学校・日本学部・助教授

越智郁乃（OCHI IKUNO）

京都大学・文学研究科・グローバルCOE研究員

研究者番号：10624215